

夢通信9月号外

文化

にがたしとのいで... 新聞のまござら... 歴史の鉄りがお知... 新しき綴り資料... 経済のさや綴り資料... 日本鎖載イ冶書連した... 日『鎖載イ冶書連した... 掲ラ鍛を関まく



衣川良介

標榜している。鎖だけでなく、顧客のニーズに合わせた鉄製品を造る。これも三十年來、鎖の歴史に始まり、鉄の歴史や古代の技術について調べてきたたまものだ。鎖の歴史を本格的に調べるようになったのは、七六年、ロイド船級協会神戸事務所責任者だった村尾朗さんと知り合ったことがきっかけだ。船級協会は、船の設計・製造から就航後の定期検査まで一貫審査する機関で、損害保険の元祖でも

あるロイドには古い資料も多い。錨につなぐアンカーチェーンの検査をしていた村尾さんが、ロイドの資料室で見つけて勉強したのが「チェーン・ケーブル・アンド・ゼア・テスティング」(一九三九年

刊)。村尾さんからそのコピーをもらい、私もアンカーチェーンの歴史を調べるようになった。この資料によると、アンカーチェーンが初めて造られたのは一八〇八年だという。従来使われていた麻綱に代わって、鍊

陽丸の引き揚げ品があり、その中に鎖が九十五点あった。アンカーチェーンは直径一・七五センチ(約四五ミ)で、現在の製品とほとんど変わらない。サビをこすると「KVG」(65)という刻印が浮かび上がった。同船は一八六五年、オランダ・ドルトレヒトのヒップス・エン・ゾーネ造船所で進水している。ロイド船級協会に残る資料を取り寄せてさらに調べたところ、そのア

ことが分かった。16世紀の技術書人ドイッのゲオルグ・アグリコラによって書かれた一五五六年刊の技術書「デ・レ・メタリカ(金屬について)」と出合ったことも大きかった。当時の世界の鉱業・冶金技術の集大成といえるもので、三百点にのぼる精巧な版画が当時の鉱工業のありさまを今に伝えている。

水力揚水機をはじめ物を作ったり運んだりする道具や、水をくむ道具に使われた鎖が描かれていて、ずっと見ていると一向に飽きない。この本の存在は知人の大学教授に教えてもらった。金ペーシのコピーをもらい、自分で冊子にした。

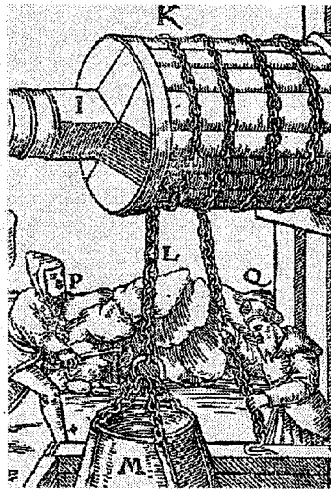
「私は私が見なかったもの、もしくは信すべき人々から実際に聞かされたもの、すべてを叙述から除いた」。序文のこの言葉は私の胸に深く刻まれていて、この心意気で調査を続けている。地方への出張で時間が空いたら、博物館に寄って、何か面白い展示や資料がないか見て回る。ホテルのロビーや喫茶店では、無意識のうちに目がスーッと天井に向かい、シャンドリアの鎖を見つめよう。

鎖の歴史は古く、紀元前から欧州の地中海を囲む港の多くで使われていた。港の入り口に鎖を張り、外敵の侵入を防ぐためだ。

※※※ 「むらの鍛冶屋」

私は日本有数の鎖の産地、兵庫県姫路市で製鎖工場を経営する傍ら、鎖の歴史を調べている。会社の創業は一九三五年(昭和十年)で、私は二代目だ。

従業員は十人ほどだが、「むらの鍛冶屋」を



16世紀の技術書「デ・レ・メタリカ」に描かれたくみ上げ装置の鎖

鎖の不思議人の輪つなぐ

◇工場経営の傍ら製造方法や歴史を研究◇

衣川 良介



鉄製チェーンが初めて英国の船舶に使用された。造ったのは鍛冶屋のロバート・フリンで、船の名は「アン・イサベラ」だ。今から十五年前には、戊辰戦争中の強風で北海道・江差沖で沈没した開陽丸のチェーンについて、江差まで行って調べて、記念施設の倉庫に開

ンカーチェーンは同年、オランダ・ライデンにあった「ロイヤル・オランダ大鍛冶会社(KVG)」で、「手作り螺旋鍛造」という方法で製造された

「私は私が見なかったもの、もしくは信すべき人々から実際に聞かされたもの、すべてを叙述から除いた」。序文のこの言葉は私の胸に深く刻まれていて、この心意気で調査を続けている。地方への出張で時間が空いたら、博物館に寄って、

何か面白い展示や資料がないか見て回る。ホテルのロビーや喫茶店では、無意識のうちに目がスーッと天井に向かい、シャンドリアの鎖を見つめよう。

小学生の時、学校帰りに必ず、父の職場をのぞいた。材料の丸棒を切る人、加熱用のコークスを運ぶ人などがせわしなく働いていた。リズミカルなハンマーの音、ゴーゴーと送風する音、真っ赤になった鉄、線香花火のように飛び散る火花... 子供のころ感じた鍛冶屋の音、色、においが体に染み付いている。奥深い鎖づくりの歴史や不思議さがすべて分かったわけではないが、たいぶ理解できるような気がしている。昨今で、ある。(きぬがわ・りょうすけ) 衣川製鎖工業社長